

事件から始まった

辻 憲男（文学部教授）

神戸開港は1868年1月1日であった。長く栄えてきた兵庫津より東、神戸村の海岸に面して居留地がつくられた。同11日、北側の西国街道を備前岡山藩の砲兵隊が通過したが、その行列を外国人三人が横切った。「行列を突っ切るなんて非礼なことをするものは、外国でもなかった」と大岡昇平は書く、「筆者は昭和十年代、三宮神社西の対面、現在百貨店大丸の裏手の位置に勤め先を持っていたので、地形が想像できるのだが、居留地48号地向側の三宮神社東側居酒屋にいたフランス水兵二名が、砲隊の間を横切ったとの説が、外国側にある」。水兵らが負傷した。ただちに米英仏の軍隊が上陸して攻撃した。事件の責任をとって、一人の武士が切腹した。しかしこの教訓は生きず、3月には堺で土佐藩兵がフランス兵をおそい、多くの死傷者を出した（『堺港攘夷始末』）。

東京生まれの大岡は、昭和13年（1938）に神戸の日仏合弁会社に就職した。フランス語の翻訳係だった。結婚して兵庫区夢野に家庭を持った。19年に召集を受け、激戦のフィリピンで敗走して米軍の捕虜になった。復員して、明石の大久保に疎開していた家族と再会した。苛烈な戦場体験は『俘虜記』『野火』の精密な文体に結晶した。フランス流の心理小説やスタンダール論を書いた。軍による会社侵略を描いた『酸素』でも、最晩年の上の歴史小説でも、わが心象風景の神戸を語った。骨太く視野の広い昭和の文学者であった。



140年前の神戸事件は、日本人とフランスとの最初の出会い＝衝突だった。